

ある老会員の弁

いま、学会員の数は四千というが、私の会員番号は百番台。番号は学会再発足後の受付順で、年齢には関係ない。しかし、とにかく「老」クラスに入ると思う。昔の中学をですぐ中央気象台の養成所で、品川の寮にはいった。夕食は時間厳守だったが、物理実験と気象学会の聴講での遅刻だけは大目にてくれる。学会にはいるのは、佐藤順一さんに入れてくださいという、台帳に名前を記入し、それだけで済んだように記憶する。佐藤さんは卓抜な記憶力の持ち主で、暦の改良をやっておられるとのことであった。

中学で習った地理通論での気象にくらべ「岡田の気象学」は、ヤル気を起こさせるに十分。それに、そのころ動気候のレポートを学会で次々に発表されていた高橋浩一郎先生が寮の舎監のお一人で、毎日の天気図を教材にした夜の実習に、若い心が惹きつけられた。戦争がひどくなり、私達の多くは戦地が職場になる。マリヤナのテニヤン島では航空艦隊が全滅して級友が四人も戦死し、一人が捕虜になった。私が所属した航空隊はマーシャル諸島で、悪天候に隠れて急襲したアメリカ機動部隊に叩かれて壊滅した。戦後何年かたって、あの悪天候が偏東風波動に伴うものを知る。

気象界には、伝統的に奨学の気風があると思う。失礼な言い方を許していただければ、歴代トップに好事家が揃っていたのかもしれない。執務時間中でも、気象の本はもとより、何か関係があるものを開いていけば仕事熱心とみられ、研究会でなにも読まないのは肩身が狭い、といった雰囲気。いうならば、なんとかの赤烏帽子である。だがこれは、お役所性とは両立し難いのであろうか。研究色を薄めなければ肝要な予算がとりにくい、といわれたりする。かような事情で、年を追って奨学の風が希薄になる。病院の待合室には今でも、学会出席のため先生お休み、の貼り紙を見かけるが、気象台職員が学会にでかけるのはどうなのだろう。

自分のことを……。学会からの機関誌や研究ノートの内容は、年とともに理解できないものがふえる。それを、不勉強だからと片づけることもできようが、気象学が日進月歩で、分野を広げ深みを増しているためとみれ

ば、慶賀すべきことである。いずれにしても、学とは次第に疎遠になる。職業がら世間への体面もあり、何も知らないでは通らないから、イージーなもので間にあわせ、良心に背き、ダメ学会員になってゆく。

私の上司でもあった木村耕三先生は AMeDAS の産みの親で、学会から岡田賞をいただいた。そして、三陸に隠栖の後も「気象学の神話」にチャレンジされる。私へのテーマは、気温のほかには水蒸気をいれた気候変化で、湿球温度の累年シリーズをしらべることである。これは、申し訳ないことに私が怠けて、為すことなく終わった。

退職は、一つの大きな断絶。私は手許にあった気象の本や資料のすべてを棄てた。ややメタフィジカルなものへの関心が強くなったためである。今も学会員であり続けているのは、長年ごやっかいになった気象界への思い出の細い糸のように感じる。

「天気」への執筆者に、知人の名は年とともに減ってゆく。今なお元気に精進される根本順吉さんは、昔寮では、中庭をへだてた北側の部屋の住人で、マイクロネシアの経験者としても先輩。学会理事の安富裕さんとは、同じ職場で机をならべていた。

論文は読んでもたいてい分からないから敬遠し、気楽に読める広場や本の紹介、編集後記などを拾い読みする。2月号「本だな」で、木村竜治さんの紹介文のなかにブリゴジンの名を見出したのはうれしかった。

蛙はいまも蛙。ちょっと気がかりなことがある。それは、気象学の世の中への窓、マスコミでの気象情報にかかわる。たとえば気圧の谷。トラフという言葉は戦後まもなく「流行」し、なんでもかんでもトラフに結びつけた。大気の流れにみられる波動性に着目しているものだと思うが、実証性がうすく、言葉が勝手にあるいていると感じるのは私のヒガ目だろうか。地形の影響・不安定・刺激などの用語も、フジー性が強いから解説には便利なのだろうが、意味不明のことが多いと思う。端的に言えば、学をはなれる方向ではないか。妄言多謝。

(篠原武次)